

平成廿七年師走十六日早稲田六番歌合

判者 兼築信行

題 池水鳥 三番

忍恋 三番(有難陳)

左 読師 荒川克美

講師 大原稔

発声 青柳隆志

右 読師 菅原秀太

講師 天之原泰洗

発声 シエーン・ハリス

左 勝二負三持一

右 勝三負二持一 右勝

池水鳥

一番左 勝

ふゆ立ちて池のみなもの母子鴨もみぢをうつし波紋をかざる

一番右

水面ゆく鴨は乱れず連りてへんげん布陣誰が兵法ぞ

判云、左は、立冬の候、「母子鴨」あはれにして、紅葉、鴨の羽色、いとあざやかなり。右は、鴨の群れを、水軍に見立てしはをかしかれども、いと、おそろし。あはれなるをもちて、左を勝ちとなす。

二番左

ながむれば池にあそべる水鳥ををさなき君と思ひかさぬる

二番右 勝

渡り来し鴨ら集へり池の面に木枯らししのぎ翼休めて

判云、右歌、木枯らしに身を寄せあへる鴨の姿、目に見るごとき風情にて、あはれなり。左歌は、「をさなき君」は、幼子をいへるか、はた、若き日の君なるか、つまびらかならねば、歌の心おぼおぼし。以右為勝。

三番左 持

水鳥の姿に惚ぶいにしへのみぬま神池湧き出づる見つ

三番右

こんこんと湧き出する池のぬくもりにあそぶ水鳥陽は沈みゆく

判云、左歌、歌がら神々しけれど、「みぬま神池」といへる、「御沼」か、あるいは「見沼」か、判者おぼつかなし。右歌、ぬるむ水のゆふぐれに冷えゆくを水鳥によそへて興ありといへども、講師、二句を讀み誤れるはくちをし。以爲持。

忍恋

四番左 勝

この先の君位む部屋に灯りともり心ときめく道遠けれど

四番右

来ぬ人を待つにかひなし小夜ふけてとぼそに聞こゆ松風のおと

右難申、「忍恋」題なれども、逢ひての後の恋と見るは僻目か。左陳申、「道遠けれど」とあれば、思ひ人とはいまだへだてあるべし。

左難申、「待つ」に「松」を掛くべきに、下旬にさらに「松風」と出させるは、同字といふべきにや。右陳申、作意なり。

判云、左、「道遠けれど」は、心の裡に遠きへだてあるをもいへるなり。右は、「待恋」の歌にして「忍恋」にあらざれば、落題といひつべし。よりて左勝。

五番左

たれゆゑにかくもくるしきますらをがおもひこがれてしのびかねつも

五番右 勝

み雪降る聖夜の街に巡り合ふ想ひよ届け片思ひの君

左難申、「巡り合ふ」の続き定かならず、いかに。右陳云、ありのままにて、ゆくりなくも、降誕前夜に片恋の君に逢へるをいへり。

右難申、「おもひこがれて」「しのびかねつも」と、心根をいへるばかりにて、こよなからず。左陳云、心根のみにて詠める歌、古来尠からず、ますらをの忍ぶる恋はつよきものにて、物に寄せて詠むはふさはしからず。

判云、右、詞つづきいぶかしけれど、心の様やさし。左、正述心緒。たけありといへども、歌のさま古しとて負く。

六番左

まどろみて恋しき人を観音に重ねし我はさびしかりけり

六番右 勝

君ゆゑの恋はつもりて信濃なる穂高の峰に雪はふりつ

右難申、「観音」とよめるは、仏神を詠めばよき歌なりとてか、左陳云、『今昔』『宇治拾遺』に、観音を夢想して恋ふる僧のあれば、故事ありといふべし。

左難申、一首のうち、積もる雪、降る雪のそれぞれあるはいかに、右陳申、積もりたる雪も、降る雪に連なるといふべし。

判云、左、観音とよめるは面白けれども、「さびしかりけり」の句、凡俗なり。右歌、泥(こひ)の積もるを降る雪に重ねたる、すぐれたり。以右為勝。